

### 日本の電子出版・これまでの流れ

電子出版は80年代にCD-ROMによるパッケージメディアとしてスタートしたが、最近ではインターネットを利用したオンライン配信が拡大しつつある。ただし、ビジネスとしての電子出版は、いまだ試みと呼ぶべき段階にとどまっている。

出版物を電子的に提供する試みは、紙の出版が抱えてきた問題点を克服することを目指している。紙の本は、大量生産を前提とした印刷・製本工程や物流、在庫管理を必要とする。限られた市場に向けた少数の専門書籍の場合、こうしたコストを吸収するために価格が高くなり、そのためなおさら売りにくくなるという悪循環が生じる。電子書籍をインターネットで配信する電子出版なら、紙であるために生じる物理的な問題は極めて少なく済む。そのため、これまで苦勞していた小規模書籍出版社や、出版を志しながら実現できなかった潜在的な出版人たちがまずこの試みに関心を示した。その代表格が93年に家庭のPCでも電子出版ができる「エキスパンドブック」日本語版を出したボイジャーだった。

また、同社の萩野正昭社長は、当初から紙の本が持っている機能をパソコン上で実現しようというコンセプトを持っていたため、既存の出版からの電子化を考えていた出版人と共通の認識を持つことができた。同社は新潮社や大日本印刷と共同で、縦書き表示や印刷用フォントの移植などを実現。多くの出版社が電子出版をまじめに考えるきっかけにもなった。

インターネットを使った配信については当初、ボランティア的なものが中心だった。米国で市民が出版物を電子化している「グーテンベルクプロジェクト」を参考にした青空文庫は、文字通りボランティアで出版資産を電子化してインターネットで公開する試みであり、作家の富田倫

生氏によって立ち上げられた。一方、ジャーナリストの古瀬幸広氏が中心になって開設した「honya.co.jp」は、読み手を会員に組織して書き手を支えようという新しい出版構造を作るビジョンを持っている。

次に、こうした出版物のネット配信をビジネスとして手がける業者も現れた。中でも95年からパソコン通信での電子本販売を続けている老舗格の電子書店パピレスは、既存出版物を電子化する小売店というスタンスで生き残っている。

### 大手出版社の本格参入

しかし、こうした動きは、既存の出版社にとって歓迎できるものではなかった。青空文庫が電子化する著作物は基本的に著作権保護期間が終了したものが対象になっているが、中には文庫として市場に存在する著作物もある。また、電子書店パピレスが一部の著者と直接契約を結んで電子本の販売を行ったことが、その出版物の元本を刊行している出版社の逆鱗に触れた。

そうした背景で登場したのが、大手文庫出版社が99年に共同で立ち上げた電子本販売サイト「電子文庫パブリ」だった。既存出版社がインターネットでの電子本販売手段を持つことで、著者が他の業者に流れることを防ぐのが最初の目的だった。しかし、電子書籍の市場性という点では、今日に至るまで数字的に把握するべきレベルになっていない。

### 電子出版に適したジャンル

百科事典は90年代中盤にCD-ROM化が盛んに進められ、「今後は紙による百科事典刊行はあり得ない」とまで言われるようになった。事・辞典もここ数年は電子辞書が大きな市場を形成するようにな

り、販売価格ベースの年間売り上げが紙の辞書に迫るまでになっている。地図についても、製作工程の電子化とともに、カーナビやインターネットの地図サイトなど利用の幅が広がり、地図出版社の中には売り上げの半分がカーナビ向けという会社も現れた。

こうしたコンテンツに共通しているのは、検索機能など電子的なコンテンツならではの便利さがあり、利用者にとって利用スタイルもイメージしやすいという点だ。逆に、これまでの電子書籍にはこの明確な利用ビジョンが見えなかったと言える。

### PDAは電子出版の一大鉱脈となるか？

そうした中、99年にシャープが開始した電子書籍配信サービス「ザウルス文庫」に始まる各社のPDA対応の動きが、閉塞感のあった電子出版に光明を与えている。PDAには専用端末のように特化した機能はないが、若年サラリーマンに普及していたため、通勤時などに読むという利用のイメージが見えやすかった。パブリのメンバーでもあった大手出版社が、ザウルス文庫向けコンテンツが予想以上の売れ行きだと報告したことで、他のメンバーにもPDAへの関心が広まった。また、ボイジャーも、標準的な電子出版フォーマットになりつつある「T-Time」のPDA対応版を2001年の暮れにリリースした。

2002年に入ると、携帯電話キャリア最大手のNTTドコモがシャープと共同で秋からPDA向け電子本配信を開始すると発表。4月下旬の東京国際ブックフェアではボイジャーとドコモの両陣営が大型のブースを出し、目玉の1つにもなった。

果たしてこの“PDA 鉱脈”がeBookの未来をどう左右するのか、注目される。

(星野 渉 文化通信社)



## [インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ [iwp-info@impress.co.jp](mailto:iwp-info@impress.co.jp)